第１章　大友氏遺跡の概要と価値

１．大友氏遺跡の地理的・歴史的環境

（１）地理的環境

大友氏遺跡が所在する大分県の県名は、県庁所在地の郡名に由来し、古く『豊後国風土記』には「碩田 (おほきだ) 国」の名で見える。その後「大分郡」と見られることから、「おほきだ」が転じて「おおいた」になったと考えられている。碩田の名は『日本書紀』・『豊後国風土記』の「景行天皇九州巡幸説話」中にある「広大なる哉、この郡は。よろしく碩田国と名づくべし。」の景行天皇の言葉から、土地の広大さに由来とする説や、台地や小河川が多く、広大な土地を求め難い大分平野の特徴から「多き田」から転じたとする説がある。しかし、こうした説に対し、半田康夫氏は､「分」は「段」と共に「キダ」と訓まれていたとし[(1)]、渡辺澄夫氏は「キダ」は「段」で、きれめ・きざみ・だんの意と解し、「「分」はわかち・わかれの意で、分離の意味において両者はあい通ずる故、「オオキダ」は大きく (大いに) きざみ分けられた所と解される」と述べている[(2)]。つまり、地形が錯綜している「刻まれた地形」を表現していると考えられ、大分川によって刻まれた河岸段丘等による地形を示すと想定している。

こうした「大分」の由来は、平野を丘陵や河川が分断した地形の各所に小規模な平野が展開する大分平野の特色を端的に示している。このような特徴を有する大分平野の西部、大分川の左岸地域は、古代から現在まで、約 1200 年間にわたり豊後国の政治・経済・文化の中心地となっている。大友氏館跡のあるこの地域は、東側を大分川が北流し、北側には別府湾が広がる。南側の上野台地は高崎山から東に延びる標高約 40 ～ 30 mであり、その西側には標高 628 mの高崎山方向へ標高 80 mから 100 mにおよぶ台地が続いている。

大友氏の拠点であった中世大友府内町跡は大分川の左岸に形成された都市遺跡であり、最盛期である戦国時代末期には南北 2.1km、東西 0.7km の規模をもつ。遺跡の立地する自然堤防の現在の標高は別府湾に開口する大分川河口に近い場所で約 4 m、上流の地域で約 6 mを測る。遺跡の南西部から西側については、旧河道と考えられる低湿地の広がりが確認されている。この低湿地は上野台地の北側裾から北の別府湾方向に伸びており、府内古図に描かれる戦国時代末期の舟入に接続している。この舟入は近世府内城下町では、外郭にあたる東側の外堀に継承されている。

中世大友府内町跡での発掘調査では、遺構が黄褐色系の粘質土層上面において検出されるが、こうした土層は、東の大分川に近い地点ほど厚く、4 m近くの厚い堆積がみられる地点もある。大分川から遠い西側の地点では 2 mに満たない場所もある[(3)]。黄褐色系の粘質土の下部には砂層が厚く堆積しており、砂層中からは縄文時代晩期から古墳時代前期の遺物が出土する。黄褐色系の粘質土上面からは 8 世紀から近世初頭までの遺構が検出されることから、本層は古墳時代前期から 8 世紀の

間に形成されたものと考えられる。

（２）歴史的環境

大分川の河口に近い左岸地域では、古くは縄文時代後期の土器片が低地部で出土する。弥生時代では、東田室遺跡で前期後半の遺構・遺物の出土がみられ、後期になると、大道遺跡群にて環濠集落の形成が認められる。

古墳時代には、４世紀代の古墳であり、三角縁神獣鏡を出土した亀甲山古墳が西側の台地上に築造される。５世紀代には上野台地の先端部に前方後円墳である大臣塚古墳が築造される。古墳は葺石をもち、円筒埴輪がめぐると推定されている。６世紀になると古国府地区を臨む上野台地の南側斜面地に南太平寺横穴古墳群が形成される。こうした横穴墓に対して、明確な高塚古墳の存在は知られていないが、上野台地先端部地域には、多くの古墳伝承が残り、かつては、大臣塚古墳以外にも多くの高塚古墳が存在していた可能性が高い。

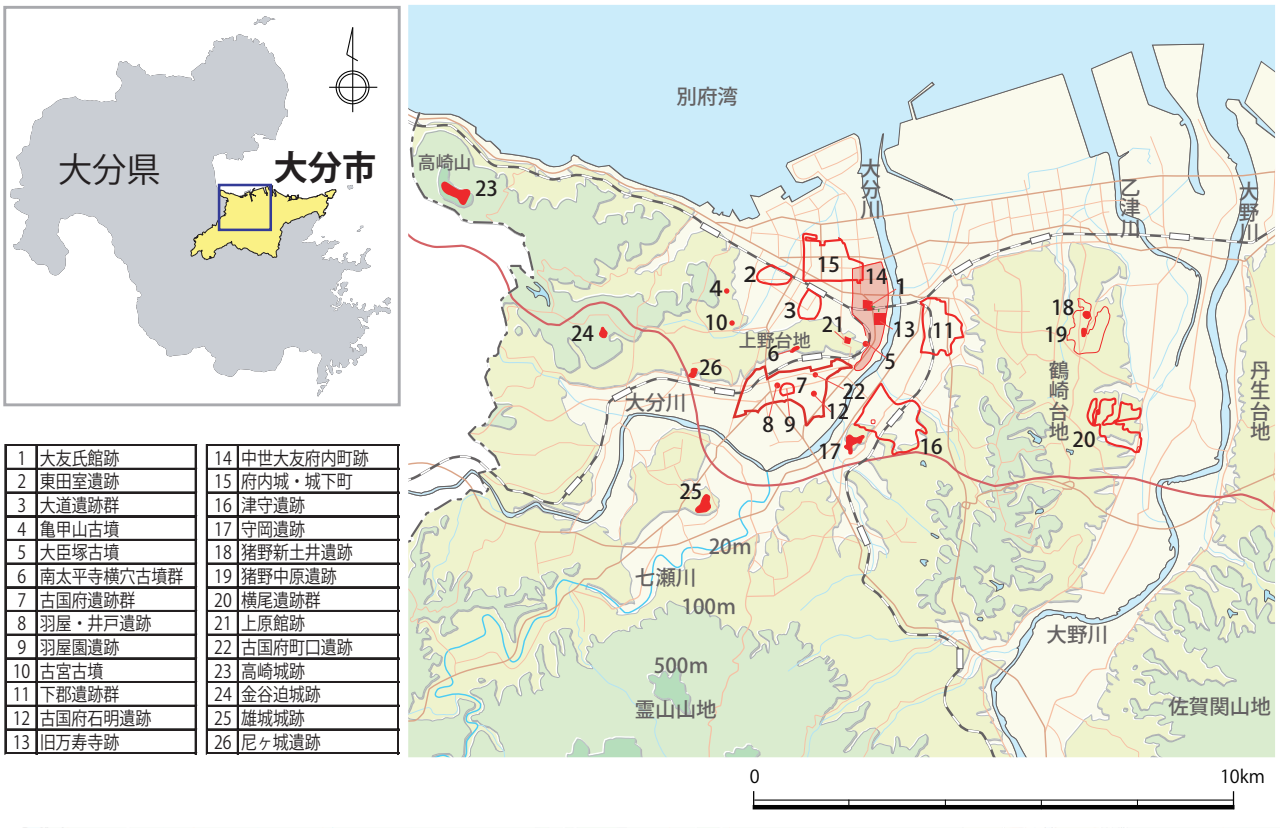
７世紀には、古国府地区の西側にあたる羽屋（はや）地区において特別な性格をもつ地域と評価される遺跡が出現する。７世紀前葉に比定される長大な掘立柱建物跡があり、規格的な配置状況を示し、官衙的な様相を呈することから、「屯倉」に関連する遺跡の可能性も指摘されている。こうした様相は、羽屋・井戸遺跡や羽屋園遺跡などに継承され、前者については「評」関連の遺跡と評価される。また、羽屋園遺跡の状況から、少なくとも８世紀前半までは上野台地の南側平野の西部地域に拠点的な施設が集中していたと考えられる。

こうした遺跡状況に呼応するように築造されているのが古宮古墳である。古宮古墳は前述の遺跡集中地域の西側にあたる急峻な斜面地に築かれており、現在、国史跡に指定され整備されている。墳丘は一辺 12 mの方墳であり、中心には九州で唯一の石棺式石室が設置されている。被葬者に関して古墳の規模から 672 年の壬申の乱で大海人皇子 (天武天皇) に従い活躍した大分の君恵尺 (えさか) の墓と想定されている。

その後、律令体制の確立に伴い設置された豊後国府については、「古国府」の地名が残ることから、引き続き上野台地南側の平野部に配置されたと考えられてきたが、これまでの考古学的調査では、古代の遺構・遺物は確認されず、国府政庁本体の所在は未だ不明である。８世紀後半には、大分川対岸にあたる下郡遺跡群で８～９世紀の掘立柱建物跡をはじめとする遺跡の大規模化が看取され、上野台地南側の遺跡様相とは対照的な状況を示している。また、戦国時代末期に「府内」と呼ばれる大分川左岸の自然堤防上でも８世紀後半から９世紀の大型掘立柱建物跡や井戸跡などが検出されている。これらの遺跡は大分川を挟み下郡遺跡群の対面にあたり、渡河に関連する遺構の可能性も想定される。この地域は、11 世紀から 13 世紀代には「宇佐神領大鏡」の天喜元年 (1053)、康平２年 (1059)、承保４年 (1077) に「勝津留畠四至」として登場する。これらの文書の示す勝津留畠の範囲は、上野台地東部から北の自然堤防上にあたり、戦国時代末期に「府内古図」に描かれる豊後府内

の都市域をも含んでいる。「宇佐神領大鏡勝津留畠四至」の注目すべき点として、天喜元年の申文に記載された「高国府」の地名がある。「高国府」は、西の限りを示すものとして記述されており、現在、上野台地東端部と考えられている。この「高国府」に関して、13 世紀中頃に大友氏 3 代の頼泰が豊後に守護職として下向した際に「高 (隆) 国府」を強引に割譲する行為との関係が注目される。以上のことからは、「高国府」や「勝津留畠」については早い段階での大友氏による守護所の設置場所と関わる重要な地域と考えられる。また、同じ申文の中には「東限北廻り、二方市河」の記述もあり、当時、大分川が市河と呼ばれ、この段階にすでに大分川沿いで河原市が立っていたことが知られ、中世「府内」の初源的な姿と考えられている。

こうした姿と関連する当時の豊後府中 (府内) の状況を示す文書に仁治 3 年 (1242) の「新御成敗状」がある。これには都市の規範を示す条項が書かれており、このまま解すると 13 世紀代に豊後国府中 (府内) が都市として成立し、機能していたことになる。しかしながら、こうした状況は発掘調査をはじめとする考古学的なデータでは未だ確認できていない。むしろ、13 世紀代の遺構は、上野台地の南側平野部に位置する古国府石明遺跡等で確認されている。古国府石明遺跡では、13 世紀を中心とする大規模な溝とその内側を小規模な溝で区画し、池をもつ居館跡と推定される遺構の存在が確認されており、「国府」推定地に近すぎず、遠すぎない位置関係や遺跡内容から初期の守護館の可能性も指摘される。



1	大友氏館跡	14	中世大友府内町跡
2	東田室遺跡	15	府内城・城下町
3	大道遺跡群	16	津守遺跡
4	亀甲山古墳	17	守岡遺跡
5	大臣塚古墳	18	猪野新土井遺跡
6	南太平寺横穴古墳群	19	猪野中原遺跡
7	古国府遺跡群	20	横尾遺跡群
8	羽屋・井戸遺跡	21	上原館跡
9	羽屋園遺跡	22	古国府町口遺跡
10	古宮古墳	23	高崎城跡
11	下郡遺跡群	24	金谷迫城跡
12	古国府石明遺跡	25	雄城城跡
13	旧万寿寺跡	26	尼ヶ城遺跡

図 1-1　大友氏遺跡周辺の遺跡分布図

14 世紀代には、徳治元年 (1306) に万寿寺が大分川を東に望む自然堤防上に建立される。これまでの中世大友府内町跡の発掘調査で遺構が確認されるのはこの時期からであり、以後連綿と遺跡の形成が認められる。遺跡は 16 世紀中頃から後半に最盛期を迎え、「府内」が大友氏の除国を経た 17 世紀初頭 (1602 年頃) に近世の府内城下町に移転するまでの間の遺構や遺物が出土する。

豊後府内が最盛期となる 16 世紀中頃から後半の遺跡は、周辺地域でも確認される。大分川の対岸にあたる下郡遺跡群や津守・片島地区では 16 世紀に比定される方形館や方形区割りが確認されている。さらに独立丘陵である森岡丘陵上には山城的な遺構の存在が確認されている他、鶴崎台地上においても猪野新土井遺跡や猪野中原遺跡、横尾遺跡などで方半町規模の方形居館跡が確認されている。

上野台地上には大規模な土塁と堀を廻らしている上原館跡があり、上野台地の南の古国府地区には、現在でも街路に沿った短冊状地割が残り、古国府町口遺跡の調査では、間口約 20 mの武家地と考えられる方形区画が確認されている。また、西方にあたる高崎山の山頂は大友氏の詰城である高崎城があり、周辺には金谷迫城・雄城城・尼ヶ城がある。このように豊後府内の周辺部には大友館や上原館を中心に、防御に配慮した家臣団の居館が周辺に配置されるという構造パターンが認められる。

南蛮貿易の推進により繁栄した豊後府内は、天正 14 年 (1586) の島津軍の豊後侵攻により灰儘に帰す。発掘調査により随所で確認される焼土層や火災処理遺構等は当時の様子を具体的に示している。その後、府内のまちは部分的に復興するが、もはや大友館は再建されることはなかった。豊臣秀吉の九州平定後、大友氏は豊後一国を安堵されるが、文禄 2 年 (1593) 朝鮮出兵の際の失態を主な理由として豊後国を没収され、豊後における大友氏 400 年の歴史は幕を閉じる。

府内では早川長敏に続き入府した福原直高により慶長 2 年 (1597) に府内城の築城が開始される。築城場所に関しては、四神相応の好所を選定した結果、中世大友府内町跡と当時の外港沖ノ浜との間の地が選ばれた。慶長 7 年 (1602) には関ヶ原の戦いの後に福原に代わり府内城主となった竹中重利が城下の主要施設を完成させ、中世大友府内町の住民は新城下町に移転させられ、名実ともに中世都市豊後府内の命脈は絶たれてしまうのである。

近世城下町の骨格は、現在まで継承され、今も県都大分市の中心として機能している。一方、中世大友府内町跡の多くのエリアはその後、主に田畑として利用されたとみられ、そのため大きな改変はおこなわれず、中世の地割りをよく残している。

【註】

（1）　兼子俊一編 1956『大分県の風土と沿革』大分大学社会科研究会

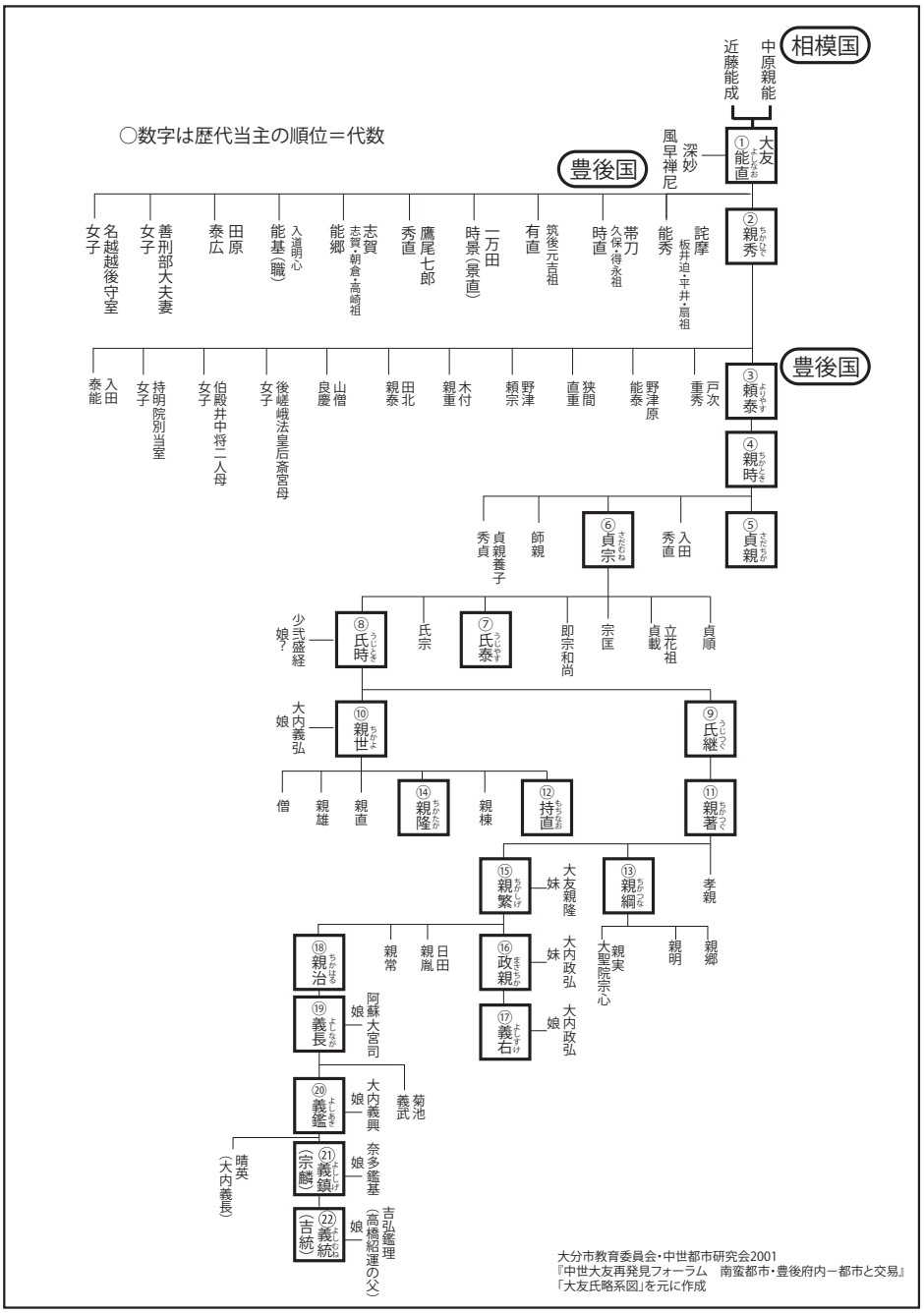
（2）　大分市史編さん委員会 1955『大分市史』上巻

（3）　大分県教育庁埋蔵文化財センター 2007『豊後府内 7』「中世大友府内町跡第 20 次調査区」一般国道 10 号古国府拡幅事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書（3）大分県教育庁埋蔵文化財センター調査報告書第 16 集

２．大友氏についての沿革

（１）中世豊後の歴史は大友氏の歴史

鎌倉時代、征夷大将軍源頼朝は九州支配にあたり、後に九州三人衆ともよばれる関東御家人であった武藤資頼、大友能直、島津忠久の３氏を遣わした。一般的に、この時の３氏の所領は、武藤氏が前三ヵ国（豊前、筑前、肥前）、大友氏が後三ヵ国（豊後、筑後、肥後）、島津氏が奥三ヵ国（薩摩、大隅、日向）であったといわれる。以後豊後国は文禄年間の大友氏の除国まで約 400 年間に渡り大友氏によって統治されることとなる。



大分市教育委員会・中世都市研究会2001
『中世大友再発見フォーラム　南蛮都市・豊後府内－都市と交易』
「大友氏略系図」を元に作成

図 1-2　大友氏家系図

大友氏一族の長い歴史の中で最も色鮮やかに映えるのは、21 代大友義鎮（宗麟）の時代である。彼は守護として九州北半６カ国の支配権を手に入れ、戦国大名としての威容を示した。また、自ら転宗してキリスト教の保護に力をいれ、異国の新文物を積極的に吸収しようとしたキリシタン大名の１人として広く知られた人物である。この宗麟の時期を頂点に、中世の豊後は大友時代とよぶにふさわしく、大友氏を軸にさまざまな歴史が展開した。

（２）大友氏の豊後入国

上野台地上に所在したと考えられる豊後国府の主である国司は、大友氏が豊後国守護に命じられた頃には、現地赴任する受領国司の姿から、現地に赴任しない遙任国司へとその姿を変え、豊後国の中心部は、国府所在地であった上野台地上から大分川左岸の河口付近（元町、顕徳町、錦町、長浜町一帯）へと政治・経済・文化の中心を移すこととなる。

大友氏の豊後入国については、初代能直、２代親秀とも守護として入国した事実はないが、この頃に、能直・親秀の庶子家が豊後に入り土着している。大友惣領家として最初に豊後に入国したのは３代頼泰である。頼泰は、鎮西奉行として、元寇で豊後国の御家人を従え奮戦するが、これより先の仁治３年（1242）「新御成敗状」二十八箇条、寛元２年（1244）には「追加」十六カ条を制定し、豊後国統治の基本方針を表明するなど、豊後治国の基本を定めている。

なお、これまで実施された中世大友府内町跡での発掘調査では 13 世紀中葉～末頃の遺構・遺物の検出事例は少なく、当時の府内に都市的な空間が存在したか否かについては依然として不明である。

（３）南北朝時代の大友氏

３代頼泰の後、執権北条氏の専制（得宗専制）に反発した足利尊氏・新田義貞らによる元弘の乱によって鎌倉幕府は滅亡し、建武の新政と呼ばれる後醍醐天皇の政権が始まるも長続きはしなかった。その後、天皇家は北朝 (京都) の光厳天皇と南朝 (吉野) の後醍醐天皇に分裂し、全国はいわゆる南北朝時代とよばれる争乱の渦に巻き込まれていく。当時の大友惣領家は６代貞宗で、巧みに両勢力を天秤にかけ大友家の進む道を探る。この貞宗の代には、惣領が庶氏に知行を分け与える分割相続の形態を、嫡子単独相続の形態へと切り替えるが、これが南北朝対立と絡まり、複雑な大友氏一族内の南北対立を生みだす原因となった。また、足利尊氏の子で尊氏の弟直義の養子となった直冬の下向で、九州の武士勢力は３分され、さらなる混乱を招く。その後、大友惣領家は足利尊氏派（北朝方）の立場をとり、九州の北朝方の拠点となるが、８代氏時の頃には、懐良親王の率いる南朝軍が度々府内に攻め入ることとなる。第１回目の南朝軍侵入の際は、守護所で抵抗した大友軍はなすすべもなく降伏するが、間もなく北朝方に復帰を果たし、以後再三にわたり南朝軍の侵入を招くものの、高崎城にて攻防を繰り返し敗れることはなかった。この間、家

督は南朝方へと翻った９代氏継から、10 代親世へと移っている。親世は、九州の南朝勢攻略にあたり、当時九州探題であった今川了俊に協力を惜しまず、南朝一掃の後、多くの恩賞を与えられ、大友氏中興の祖といわれる。恩賞地は豊後を中心とするものであり、親世の代をもって大友氏は守護大名として確固たる地位を掴んだ。

しかし、親世は、自分の家督を兄氏継の子親著に譲ったことにより、大友家内部の家督騒動を作り出す。すなわち､親著からは親世の子持直へと家督が移るという、氏継系・親世系の交替相続が、親著の長男孝親による「三角畠の乱」を生み、そこに中国の雄、大内盛見の介入を許すことになる。この大内盛見は、大友領有の博多港を拠点とする対外貿易の利権をめぐって、大友 12 代持直によって自刃させられるが、その後の持直は幕府・大内氏のほか、孝親の弟親綱（13 代)、実弟親隆（14 代）から豊後を追われる。これより以前、大友の家督は持直の譲与がないにもかかわらず、幕府から親綱に安堵された。親綱は持直の弟親隆に、親隆は自分の娘を妻にするという条件で親綱の弟親繁にと家督を譲ったが、親繁は自分の嫡子政親に家督を譲る。ここに交替相続に終止符が打たれ、惣領家への安定した権力基盤が形成されることとなる。

（４）戦国時代の大友氏

戦国時代の開始時期をどこに求めるかについては多くの説があるが、それがそのまま豊後にあてはまるものでもない。一説である応仁の乱の当時にあっても、豊後では大友親繁、政親父子が乱に深入りすることなく、内政の充実に力を注いでいた。

このような豊後の情況の中で、13 代親綱の子大聖院宗心が大内氏の援助の元に大友の家督をねらって策動する。この罠にかかったのが政親の子 17 代義右で、ついには父子の対立と両者の死を招いた。この事件を収拾したのが政親の異母弟親治である。以後、義長・義鑑・義鎮・義統と安定した嫡子単独相続が行われる。

親治・義長の代に、分国統治の末端機構として各地の政所が設置され、あるいは地域政治の責任者方分（方面別政治責任者）が置かれるなど、新しい政治体制が確立する。また､戦国大名が分国の直接的支配を強化するための基本である分国法が、義長によって「条々」という形で定められるなど、領国支配の確立へ向けて奔走した親治・義長父子の代において大友氏は、戦国大名への歩みを大きく進めることとなる。

義鑑から義鎮への移譲は､大友家最後の内紛「二階崩れの変」によって実現した。義鎮が家督をついだ翌天文 20 年（1551）７月、ポルトガル船が日出沖に来航し、翌８月には義鎮の招きにより、フランシスコ・ザビエルが周防山口から府内に入った。義鎮の許可を得たザビエルは布教を始めるが、その最中に義鎮の弟晴英が内紛によって死亡した大内義隆の後に迎えられ、大内義長を名乗る。義長は６年後の弘治３年（1557)、毛利元就に攻められ、短い一生を終える。義鎮は、父義鑑から継いだ豊後・肥後・筑後のほか、天文 22 年（1554）に肥後国を、永禄２年（1559）

には豊前・筑前の両国を安堵され、６カ国の大名として君臨する。ここに 21 代義鎮は、過去最大の版図を築くこととなる。永禄５、６年ごろ剃髪して宗麟と号し、臼杵丹生島城に移り、天正元年（1573）には家督を嫡子義統に譲った。

豊後でのキリシタン布教は、住院の建設・育児院の設立・病院あるいは教会の建設が行われた他、宗麟の次男親家や側近田原親賢の養子親虎が受洗するなど、次第に定着した。そして一時は、豊後府内がイエズス会の日本におけるキリスト教布教の拠点となった。一方では、奈多大宮司家出身の田原親賢と宗麟夫人によるキリシタンの圧迫が行われるなど軋轢も生じた。宗麟は夫人と離婚後の天正６年（1578）、受洗してドン・フランシスコと命名された。宗麟はキリスト教的理想国家建設を夢見て、島津氏に追われた伊東氏の本拠地の回復とキリスト教国家建設を目的に日向侵攻に踏み切るが、耳川の合戦にて大敗を喫する。以後、各地諸将の離反はもちろん国内の一族あるいは重臣たちの反逆などを招来してしまい、さらには天正 14 年（1586）、九州制圧を目論む島津氏の豊後侵攻を許すこととなる。12 月 7 日からの鶴賀城攻防につづく 12 月 12 日の戸次川の合戦で大友方は大敗し、有能な将である利光宗魚･長宗我部信親らが戦死し、援軍としてかけつけた四国連合軍仙石秀久･長宗我部元親と、22 代当主であった大友義統は府内を脱出する。危機は豊臣秀吉の援軍で切り抜けるが、戦後、大友氏は豊後一国を安堵されたに過ぎなかった。それとは別に秀吉は大友宗麟に日向一国を与えようとしたが、宗麟はこれを辞退し、その直後の天正 15 年（1587）5 月 23 日、隠棲していた津久見にて没してしまう。

（５）その後の大友氏

文禄元年（1592）３月、大友義統は家督を長子の義乗（23 代）に譲り、６千名の士卒を率い、黒田長政の指揮のもとに朝鮮に出兵するが、翌文禄２年（1593）、小西行長の援軍要請に対応できなかったという理由で知行を没収され、能直以来続いた大友氏の豊後支配は終わった。慶長５年（1600）、関ヶ原合戦では西軍について豊後に入り、お家再興をかけ黒田孝高と戦うが、石垣原の合戦で敗北し、大友家再興の夢は消えた。その後の大友氏は、江戸幕府の儀式を司る高家として義統の子である正照の血統が仕え明治に至る。

（６）大友氏と対外交易

大友氏は大陸に近い九州の地の利を活かして、累代にわたり東アジア各国と対外交易を進めた。

鎌倉時代末期の６代貞宗は中国・元の高僧、中峰明本と書簡や贈答品をやり取りし、室町幕府による明への勘合貿易では、宝徳３年（1451）に出発した貿易船 10 隻のうち１隻を 15 代大友親繁が仕立てた。20 代義鑑時代の天文 10 年（1541）には中国船が豊後に来航、明人 280 人が上陸している。朝鮮とは 12 代持直による永享元年（1429）の貿易船派遣を手始めに、博多商人も介在し 15 世紀を中心に交易が行われた。そして、宗麟・義統時代になると、カンボジアと対等の外交関係を結

ぶなど東南アジアとも交易し、さらにポルトガル船も来港するなど、グローバルな国際関係を築いた。

宗麟は天正元年（1573）ごろ南蛮へ貿易船を派遣するが、交易先の南蛮国で船に事故があり、南蛮国の国守（国王）が船の修繕を援助したという。また、薩摩・島津氏の外交僧を務めた京都・建仁寺の禅僧が残した史料には、天正７年（1579）の島津義久からカンボジア国王へあてた書状がある。それによると、薩摩の港に漂着したカンボジア船の乗組員を島津氏側が尋問し、カンボジア国王の手紙と贈り物を宗麟に届けるために来航したと聞き出した。当時、大友氏と島津氏とは激しい戦争状態で、島津義久が書状で大友の軍勢を大敗させたと宣伝した結果、カンボジア使節は島津に品物を献上したと記されている。カンボジア国王の宗麟あての書簡の写しもある。宗麟を「日本九州大邦主源義鎮」と記し、国王が、宗麟からの贈答品に礼を述べ、返礼に「銅銃」「蜂蝋」や象１匹と象使いを贈ろうとしたという。

このように宗麟・義統期の大友氏は、日本の一地方を支配する戦国大名でありながら、カンボジア国王と対等の外交関係を結んでいるのである。17 世紀初頭の朱印船貿易時代になってようやく進んだ日本の東南アジア貿易に対し、その数十年前から交易を行った大友氏は極めて先進的な側面を有しており、武家社会における政権定義の枠組みをはるかに超えた「アジアン大名」ともよばれるグローバルな志向性をもった国際的地域政権を営んだ大名として近年再評価されている。

表 1-1　大友氏関連年表

	当主	大友氏・府内　関連事項	国内・国外の出来事
平安時代		11 世紀半ば　「勝津留」の形成 1053［天喜元］“高国府”“市河”の呼称 1059［康平 2］1077［承保 4］田中寺・市河の記載 1172［承安 2］このころ大友能直誕生。	1127 年南宋成立 1156［保元元］保元の乱 1159［平治元］平治の乱 1167［仁安 2］平清盛　太政大臣となる。 1185［文治元］平氏滅亡。
鎌倉時代	能直（初代）	1196［建久 7］大友能直、豊前・豊後両国守護職兼、鎮西奉行に任ぜられる。	1192［建久 3］源頼朝征夷大将軍となる。 1195［建久 6］東大寺大仏殿再建される。
	親秀（2 代）	1219［承久元］２代親秀、豊前・豊後国守護職及び鎮西奉行等諸職を継ぐ。 1221［承久 3］承久の乱が起こり、大友親秀、幕府軍に従い京都に攻め上る。 1223［貞応 2］能直、京都で卒し、嫡子親秀が継ぐ。 1234［文暦元］“府中”初見	1221［承久 3］承久の乱　六波羅探題の設置 1232［貞永元］御成敗式目の制定
	頼泰（3 代）	1236［嘉禎 2］大友親秀、豊後国守護職・所領を嫡子頼泰に譲る。 1242［仁治 3］1.15「新御成敗状」 2.18　大友頼泰守護職に 1274［文永 11］蒙古襲来、大友頼泰、豊後国御家人を率い筑前博多で戦う。	1271 年　モンゴル、国号を元とする。 1272［文永 9］蒙古襲来につき、九州の御家人下向、異国防御につく。 1274［文永 11］文永の役 1279 年　元、中国統一
	親時（4 代） 貞親（5 代）	1285［弘安 8］大友頼泰、「豊後国図田帳」を幕府に注進する。 1299［正安元］鎮西引付衆がおかれ、大友貞親は三番となる。 1306［徳治元］大友貞親、臨済宗万寿寺を創建し、直翁智侃を招いて開山とする。	1281［弘安 4］弘安の役 1297［永仁 5］幕府、徳政令を発す。 1324［正中元］正中の変 1331［元弘元］元弘の変
	貞宗（6 代）	1333［元弘 3］大友貞宗、少弐・島津と共に九州探題北条英時を攻める。	1333［元弘 3］鎌倉幕府滅亡
（建武の新政）	氏泰（7 代）	6 代貞宗、所領諸職（守護職附五職（在庁職？）並所領等）を 7 代氏泰に譲り、嫡子単独相続制に改める。 後醍醐天皇より博多息浜拝領。 1335［建武 2］大友氏泰代官、貞載、脇屋義助に従って足利尊氏討伐のため東下、伊豆砂の山で、尊氏に内応、朝廷軍敗れ京都に退く。	1334［建武元］建武の新政
室町時代 南北朝時代	氏時（8 代）	1336［延元元］大友貞載、京都にて戦死。 豊後勢、尊氏に従って九州に下る。 1341［暦応 4］大友氏時が瑞光寺建立。 1344［興国 5］この頃、大友貞宗の子貞頼・氏宗は南朝方、氏泰・氏時は北朝方の両派に分かれるなど向背離合常無い状況にある。 1351［正平 6］大友氏時・田原直貞・竹田津詮之ら尊氏が南朝に下るに従い南朝に下る。 1352［正平 7］大友氏時ら豊後武士の多くは、尊氏が北朝に帰順するに従い北朝につく。 1355［文和 4］懐良親王・菊池氏豊後府内に入り、大友を下す。 “古国府”所見 1357［延文 2］大友氏時　高崎城を築き（伝承）これに拠る。 1359［正平 14］懐良親王、菊池氏を率い豊後に入る。 1361［康安元］九州探題斯波氏経、大友氏時にむかえられ豊後府中に下り高崎城に入る。 1362［正平 17］菊池武光、豊後国府中に侵入。	1336［正慶 3］南北朝の対立がはじまる。 1338［暦応元］足利尊氏が征夷大将軍になる。 1342［康永元］室町幕府が五山十刹を定める。 1348［正平 3］征西将軍懐良親王、薩摩国より肥後国菊池に入る。
	氏継（9 代）	1363［正平 18］大友氏時、足利義詮より筑後国守護職に補任。 1371［建徳 2］今川了俊の子義範、豊後国高崎城に入る。 1372［文中 1］菊池武光、豊後高崎城を攻撃。 この頃、大友氏継は南朝方となり、弟親世は北朝方となる。	1368 年明建国 1370［建徳元］今川了俊、九州探題となる。
	親世（10 代）	1379［天授 5］足利義満、大友親世に勲功の賞として肥後・筑前・肥後の地を宛がう。 1383［弘和 3］大友親世、国々散在の所領・所職を将軍義満に注進する。 義満、親世の本領・新恩地等を安堵する。 1387［嘉慶元］大智寺、開祖独芳禅師により開かれる。	1391［明徳 2］南朝滅亡1392 年　朝鮮建国 1392［弘和 9・明徳 3］南北朝合一なる。
		1394［応永元］大友親世、豊後守護職を安堵される。 1398［応永 5］大友親世、大内義弘とともに菊池氏を八代に下し、その功により、のちに鎮西奉行となる。	1397［応永 4］将軍足利義満が金閣寺をつくる。 1399［応永 6］応永の乱　大内義弘、幕府に滅ぼされる。

・芥川龍男 1990「大友氏関連年表」『豊後大友一族』新人物往来社
・大分市史編纂委員会 1987「大分市の歴史年表」『大分市史』中巻　等より作成

	当主 年号は家督相続年 （一部推定含む）	大友氏・府内　関連事項	国内・国外の出来事
室町時代	1401 年 親著　（11 代）	1404［応永 11］大友親世「春日丸」就航。 1416［応永 23］大友親著、豊後国・筑後国の守護職に補任される。 1418［応永 25］大友親世、府内の別荘にて死去。	1401［応永 8］日明貿易始まる。
	1423 年 持直　（12 代）	1423［応永 30］大友親著、所領所職を大友持直に譲る。 1425［応永 32］大友親著の子孝親、大分郡三角畠にて乱をおこす。 1429［永享元］　朝鮮貿易始まる（7 回）。	
	1431 ～ 32 年 親綱　（13 代）	1431［永享 3］　大友持直、少弐満貞とともに大内盛見を筑前怡土郡に敗死させる。 1432［永享 4］　大友氏と大内氏の戦い始まる。幕府、持直の守護職を没収。 豊後国守護職には大友親綱が任ぜられたといわれる。	
	1439 年 親隆　（14 代）	1439［永享 11］この頃、大友親綱、家督を持直の弟親隆に譲る。	
	1444 年 親繁　（15 代）	1444［文安元］　大友親繁、豊後国守護職補任。親繁、大内教弘と戦う。 1451［宝徳 3］　第 11 次遣明船の 6 号船として大友船加わる。	1441［嘉吉元］嘉吉の乱。将軍足利義教が、 赤松満祐に殺害される。
	1462 年 政親　（16 代）	1462［寛正 3］　大友政親、将軍義尚より豊後国、筑後国の守護職を安堵される。 1465［寛正 6］　大友親繁、筑後国守護職に補任される。	
	1484 年 義右　（17 代）	1469［文明元］　大友親繁、細川勝元の東軍につき、大内政弘と戦う。 1476［文明 8］　雪舟来豊 1484［文明 16］大友政親、家督を嫡子親豊（材親・義右）に譲る。 1494［明応 3］　大友材親、将軍足利義材より偏諱「義」字を許され義右と改名。	1467［応仁元］応仁の乱始まる。 1471［文明 3］博多統治・大友殿東北 6000 余戸 少弐殿南西 4000 余戸 1477［文明 9］　応仁の乱終わる。
	1496 年 親治　（18 代）	1496［明応 5］　大友政親・義右父子、不和により義右殺害される。 政親の弟親治、跡を継ぎ、宗家を再興。	1501［文亀元］『海東諸国紀』成立。
	1501 年 義長　（19 代）	1501［文亀元］　幕府、九州探題料地を大友親治に与え、大内義興の討伐を命じる。 幕府、親治の譲りにより豊後・豊前・筑後国守護職以下の所領を 義親（義長）に安堵。	
	1515 年 義鑑　（20 代）	1515［永正 12］義長の「条々」制定。 1516［永正 13］朽網親満の反乱。 1518［永正 15］大友義長、死去。親安（義鑑）が跡を継ぐ。朽網親満の乱を収拾する。 1525［大永 5］　大内義興・尼子経久の戦いに、大友義鑑は義興に援軍を送る。 1527［大永 7］　海部郡佐伯惟治、菊池義武と通じ大友義鑑に背き、臼杵長景に 攻め滅ぼされる。 1534［天文 3］　大友義鑑、速見郡勢場ヶ原で大内義隆の軍と戦う。 1536 ～ 37［天文 5 -6］頃　式三献の儀式導入されるか。 1538［天文 7］　大友義鑑、大内義隆と和す。	
	1550 年 義鎮　（21 代）	1545［天文 12］このころ、初めてポルトガル人が府内を訪れる。 大友義鑑遣明船を派遣。 1550［天文 19］二階崩の変が発生。義鑑卒し、義鎮、乱を平定し、跡を継ぐ。 1551［天文 20］ポルトガル船（ドアルデ・ガマ船長）沖ノ浜に来航。 ザビエル府内訪問。（接見場所は大友館か） 1552［天文 21］ガゴ神父沖ノ浜に来航。一万田鑑相らの反乱。 大友晴英、大内氏を継ぎ義長と改める。 1553［天文 22］府内教会建立 1554［天文 23］大友義鎮、肥後国守護職に補任。 1555［弘治元］　ルイス・アルメイダ、府内に育児院を建てる。 1556［弘治 2］　小原鑑元の乱おこる。 義鎮、海部郡臼杵に丹生島城を築き、移る。 1555 ～ 56［弘治元 -2］　鄭舜功（『日本一鑑』著者　1560 年代）来府。 1557［弘治 3］　毛利元就、大内義長滅ぼす。 ルイス・アルメイダ、府内に病院を建てる。（義鎮、会堂を寄進） 1559［永禄 2］　義鎮、将軍義輝より豊前・筑前・筑後国守護職に補任され、 九州北部 6 カ国の守護を兼ねる。九州探題職と大内家家督を得る。 1560［永禄 3］　義鎮、「左衛門督」に任じられる。 1561［永禄 4］　義鎮、毛利方の門司城を攻め、大敗す。	1551［天文 20］大内義隆、陶晴賢に滅ぼされる。 織田信長家督を継ぐ。 1560［永禄 3］　桶狭間の戦い 1567［天文 20］信長、美濃攻略. 岐阜を本拠とする。 宗麟、信長に「赤麒麟図盆」を贈る。
戦国時代	1573 年 義統　（22 代）	1562［永禄 5］　義鎮剃髪し、宗麟と称す。 1571［元亀 2］　大友軍、赤間関にて毛利軍と戦う。 1573［天正元］　宗麟、家督を子義統に譲る。 1578［天正 6］　宗麟、日向国に出兵、土持親成を討つ。同年臼杵にて洗礼を受ける。 宗麟、日向国高城にて島津軍と戦い大敗（耳川の合戦）。 1580［天正 8］　ヴァリニャーノ豊後府内に到着。臼杵にて宗麟に謁す。 ヴァリニャーノ、臼杵にノヴィシャド（修練院）を開所。 1581［天正 9］　府内にコレジオ（学院）開校。	1568［天文 21］信長、足利義昭を奉じ、上洛。 義昭を 15 代将軍とする。 1571［元亀 2］　毛利元就死去 1573［天正元］　室町幕府、滅亡する。 1576［天正 3］　信長、安土城を築造する。
	1593 年 大友氏豊後徐国	1582［天正 10］伊東マンショら少年使節、長崎を出発。 1586［天正 14］宗麟、上坂し豊臣秀吉に援軍を求める。 島津軍、日向国、肥後国方面から豊後国に攻め入る。 戸次川の合戦で、長宗我部信親戦死。島津軍府内に侵入、府内焼失。 1587［天正 15］秀吉の軍が九州に入り、島津軍退く。 秀吉、義統に豊後国を与える。宗麟には日向国を与えるが、 宗麟辞退。その後宗麟、津久見にて卒す。 1588［天正 16］大友義統、秀吉より偏諱「吉」字を受けて吉統に改名。 1592［文禄元］　大友軍 6000、朝鮮半島へ。 1593［文禄 2］　吉統、朝鮮の役による罪を問われ改易、豊後国は秀吉の蔵入地へ。 1594［文禄 3］　早川長敏入府。上原館を修築して使用か。 1596［慶長元］　豊後国に大地震あり、沖ノ浜が海中に没す。 1597［慶長 2］　福原直高入府。 1600［慶長 5］　関ヶ原の戦いおこる。 大友義統は、西軍につき、石垣原にて黒田孝高と戦い大敗。 1599 ～ 1600［慶長 4-5］府内城・新城下町建設（福原～早川）	1582［天正 10］信長、本能寺の変にて死去。 1585［天正 13］豊臣秀吉、関白となる。 1587［天正 15］伴天連追放令を出す。 1590［天正 17］秀吉、全国平定。 1592［文禄 2］　文禄の役 1593［文禄 3］　太閤検地 1597［慶長 2］　慶長の役
江戸時代		1602 ～ 5［慶長 7-9］　竹中重利により府内城完成。 町割を行い大友時代の「府内町」を移転。 1650 [慶安 3] 頃　　初瀬井路の開削。	1603［慶長 8］　徳川家康、征夷大将軍になる。 1644 年明滅亡

３．大友氏遺跡の調査概要

（１）調査前史

戦国時代の豊後府内を描いたとされる絵図は古くから知られており、すでに大正４年（1915）に刊行された『大分市史』において付図「舊府内城下圖」として紹介されている。

これらにおいて、絵図の存在から、都市としての豊後府内の存在は認識されており、1955 年の『大分市史』上では、地図上での復元も試みられている。しかし絵図自体の信憑性に疑問が呈されており、それ以上の解明はすぐには進まなかった。

しかし、渡辺澄夫氏は、大正４年の『大分市史』および『大分県郷土資料集成』におさめられた絵図を検討し、絵図の描画形式や内容自体には疑問を表明しながらも、「天正十六年参宮帳」を参照した結果、「参宮帳」に記載された町名のうち８町が上記絵図の記載地名と一致したことから、これらの絵図に一定の信憑性があるとし、将来豊後府内研究の足がかりとなることを予察した。

こうした中、1987 年に刊行された『大分市史』において画期的な「戦国時代の府内復原想定図」（中巻付図：図 1-5）が作成される。これは古絵図（以下「府内古図」という）上の情報を明治時代の旧字図上の地割や距離、絵図上にある寺社で現在と場所が変わらないものの位置と比較検討するなど、綿密な歴史地理学的作業を経て作成されたものである。その結果、豊後府内の範囲は南北約 2.1㎞、東西約 0.7㎞と推定され、以後の研究の有力な指針となった。

1996 年から始まる中世大友府内町跡の発掘調査によって、「戦国時代の府内復

図 1-3　府内古図 A 類（個人蔵）

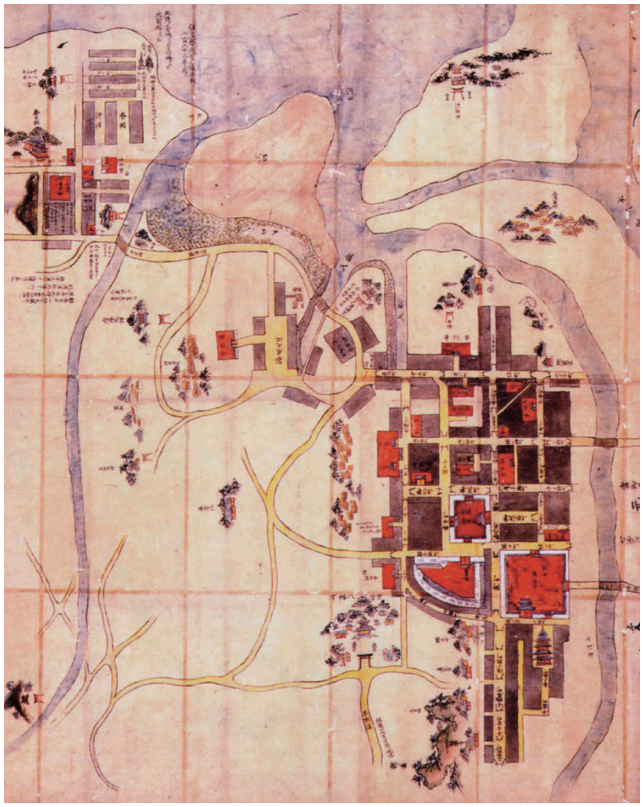


図 1-4　府内古図 C 類

原想定図」に概ね合致する調査結果が得られてきていることから、「府内古図」の信憑性も裏付けられつつある。

府内古図研究

戦国時代の豊後府内を描いた絵図「府内古図」は現在 3 種 12 点が確認され、木村幾多郎による詳細な分析がある。それによれば描写方法や書き込まれた情報の内容により、A・B・C 類の 3 種に分類し、最古相とされる A 類は寛永 13 年（1636）に発見された大臣塚古墳（大臣塔）が記載されていることにより、同年以降に描かれたとしている。

大分市教育委員会が 2006 年に刊行した『府内のまち宗麟の栄華』においては、府内古図 A 類についてさらに考証が行われ、善巧寺（天正 9 年：1581 創建）が描かれ、称名寺（永禄年間：1558 ～ 1569 に沖ノ浜に移転）が記載されないことから、天正 9 年～天正 14 年（1581 ～ 1586）までの府内を描いたものとした。

図 1-5　「戦国時代の府内復原想定図」

（2）大友氏遺跡を構成する各遺跡の調査概要

大友氏遺跡は、大友氏館跡、旧万寿寺地区、唐人町跡、推定御蔵場跡、上原館跡の 5 箇所が該当する。以下、大友氏遺跡の状況を箇所別に、特に 16 世紀後半を主に述べていく。なお、図 1-6 は、「戦国時代の府内復原想定図」に、これまでの発掘調査地点を示したものである。

①大友氏館跡

大友氏館跡の発掘調査は平成 10 年度に庭園部からはじまり、平成 25 年 12 月末時点で、29 次数の調査が行われている。現在、館内で検出された一番古い遺構は 14 世紀

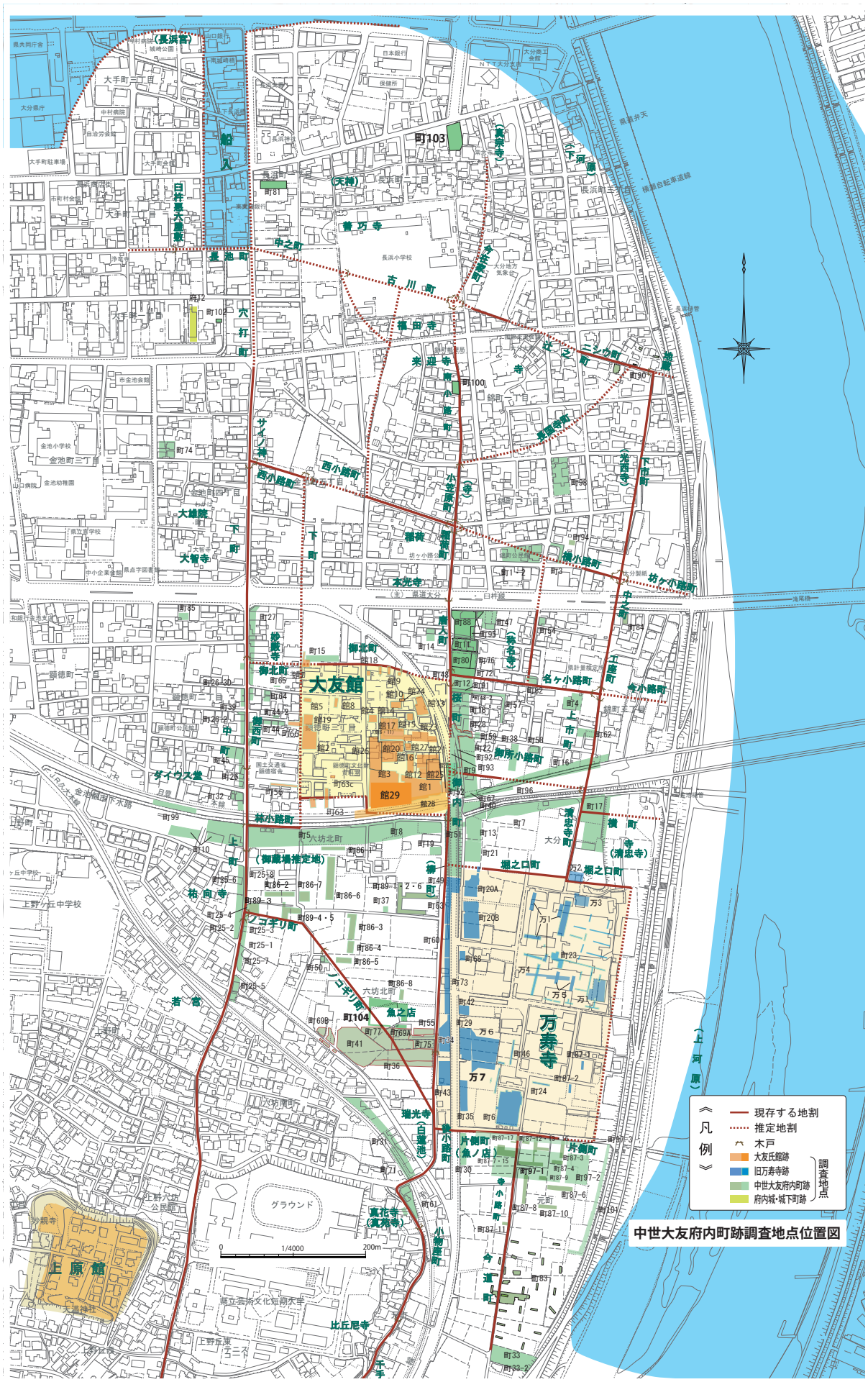


図 1-6 中世大友府内町跡調査地点位置図

まで遡る。以下、地点ごとに時期別の遺構変遷を示す。

【遺構】

大分市顕徳町所在の大友氏館跡の遺構は、館廃絶後、水田化され、現代は宅地化されていた。館が存続したおよそ 200 年に及ぶ遺構が重複していることもあり、全てが明らかになっているわけではない。特に 16 世紀後半段階の大友宗麟や大友義統代の発掘調査による館跡の建物配置等に関しては今後も十分な検証が必要である。

大友氏館跡で確認できる遺構は 14 世紀後葉からである。14 世紀～ 16 世紀半ば頃までは、館跡を象徴する多量のかわらけ廃棄土坑や掘立柱建物跡などが確認されている。また 16 世紀前後からは、館南側に庭園関連である池状の掘り込みをもつ遺構なども検出される。ただし、この段階での具体的な建物配置や門跡等の外郭施設についての十分な検討には至っておらず、今後の課題となっている。

16 世紀後半の大友宗麟や大友義統代頃の大友氏館跡の発掘調査成果を触れる。まず中心建物跡は、礎石跡 (拳大の礫を詰めた根固石) は、現状で南北約 29 m、東西約 15 mの範囲で検出されている。また前段階に中心建物を巡っていた溝は、最終段階は東側に浅く展開するのみとなっている。庭園部では、池状の掘り込み部が最も大きくなり、庭石である景石や掘り込み部と接続する南北溝 (取水または排水施設か) があり、接続部には人頭大の礫が数個見つかった。一方、外郭施設も一部確認できており、館東側には築地塀の一部であると推定される外郭施設の痕跡が見つかっている。館の南・西・北側の外郭施設は、東側の築地遺構と異なるようで、2 条の溝が確認されており、この 2 条の溝の間に土塀などの存在が推定される。館西側には、当主の私的空間などが推定され、調査では整地層や掘立柱建物跡などが検出されている。

天正 14 年（1586）の島津侵攻による館廃絶後は、館に伴う遺構は確認できていない。ただ、町屋と考えられる掘立柱建物跡や井戸跡、廃棄土坑などが検出されている。廃棄土坑からは瓦が密集した遺構もあり (館東側)、これらの瓦は館の外郭施設などに関連するものとも考えられる。

【遺物】

館内での出土遺物は、町屋とは様相が異なり、多量のかわらけが目に付く。かわらけは 14 世紀末～ 16 世紀末まで継続的に廃棄土坑から出土する。特に 16 世紀代の京都系土師器皿は顕著にみられる。これらは、儀式・儀礼で使用したものと考えられる。また高級陶磁器の出土もあり、元時代の染付けの梅瓶片や青磁類の夜学型器台、酒海壺片等が挙げられる。大友氏に関わるアンティーク品と考えられる。また庭園跡の掘り込みの底からは、植物遺体であるマツカサなどが出土しており、庭園周辺の当時の植生を明らかにすることができる。さらに下駄や漆器椀などの木製品の品々も良好な状態で出土した。

大友氏館跡全景（南から：2008 年撮影）

第 1 次調査　庭園遺構全景（西から）

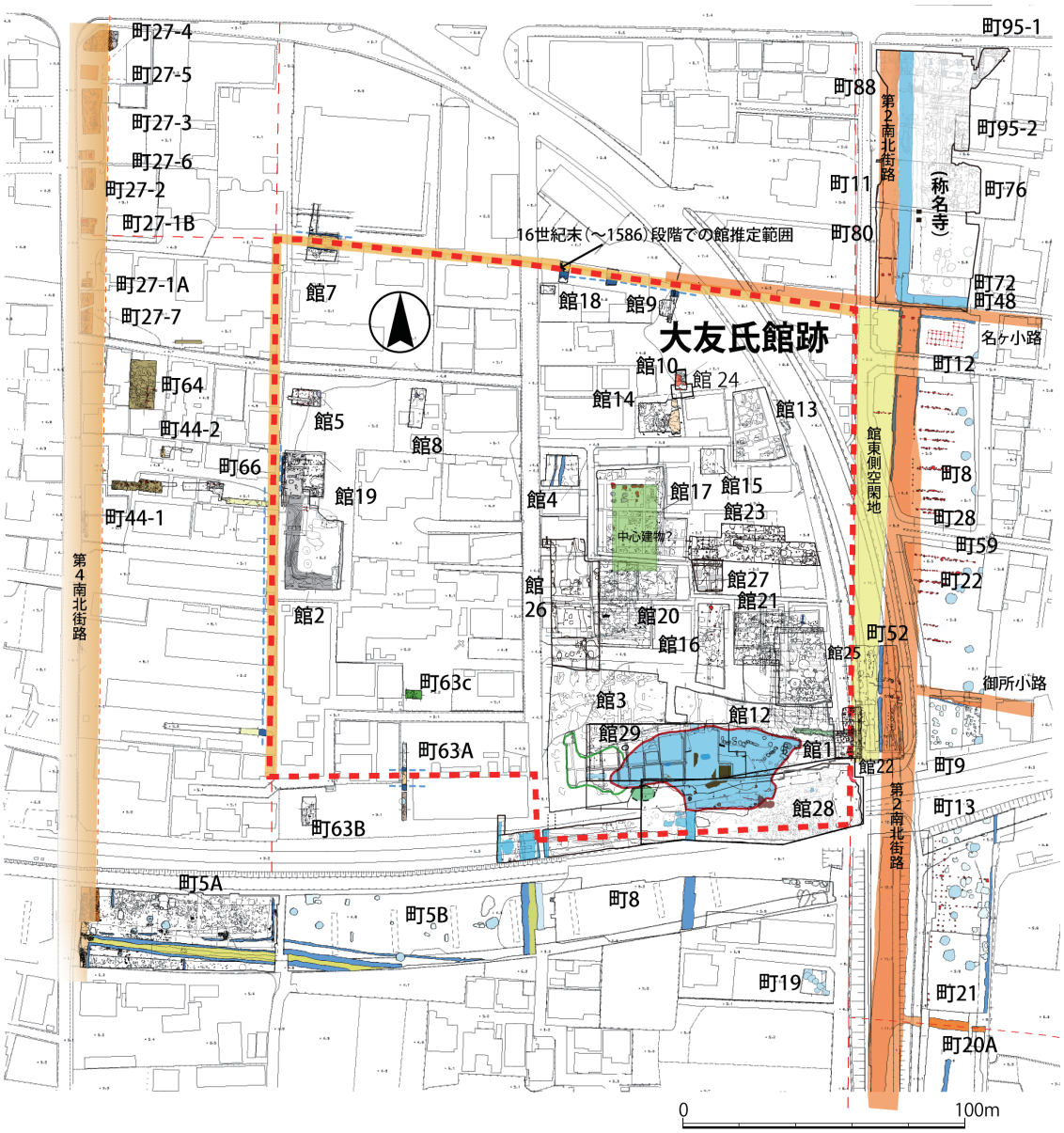


図 1-7 大友氏館跡及び周辺調査地点位置図（1/2500）

②旧万寿寺地区

旧万寿寺は徳治元年 (1306) に 5 代当主大友貞親が建立したと伝えられている。ただ、14 世紀～ 16 世紀にかけての寺院内部の伽藍配置などは、調査面積が広く及んでいないことから、詳細は明らかになっていない。

旧万寿寺地区で検出された遺構の時期の初現は 14 世紀前半である。しかし 14 世紀前半の状況は今のところほとんど不明であるため、以下には現状で、14 世紀後半から検出が顕著となる遺構と出土遺物について述べる。

【遺構】

14 世紀後半には、西側に南北方向の区画溝などが検出される。また推定境内では、区画溝などが検出されている。15 世紀は、西側に南北方向の区画溝等が検出される。内部の状況は、中央のやや北側付近で、区画溝および整地層が展開し、掘り込み地業などが行われている。また一方で、旧万寿寺跡の北側に隣接する調査では、土師器廃棄土坑や墳墓と推定される楕円形状の盛土遺構が検出されており、万寿寺を含めた寺院関連遺構と解釈されている。

16 世紀後半に、境内の西側と北側に大規模な溝が確認でき、この溝から多量の遺物が出土している。また南側の区画は、総門や築地塀などの遺構は確認できていないが、東西方向の道路状遺構が確認されており、この東西道路から北側が 16 世紀代の旧万寿寺の境内と考えられる。内部構造については溝で囲まれた一辺 30 m の基壇状の方形空間が存在する可能性があり、旧万寿寺の主要建物に関するものと推定され、大規模な整地層も確認された。また推定境内の北側エリアの調査では、大型の掘立柱建物跡が確認されており、旧万寿寺の主要施設と関連が考えられる。

16 世紀末には、島津氏の侵攻により焼失し、元の姿に再建された痕跡は、現段階では確認できていない。

【出土遺物】

旧万寿寺地区の主な出土遺物は、特に 16 世紀後半の外郭である堀跡 (西側・北側) から多種多量の遺物が出土している。土師質土器をはじめ、中国産や東南アジア産の貿易陶磁器、風炉や香炉・煮炊具などの瓦質土器、下駄や羽子板、漆器椀などの木製品や青銅製品、ガラス玉、石製品、金属製品など、出土量は膨大である。また推定境内の調査では、瓦などが多量に出土しており、他にもベトナム陶器や朝鮮陶磁や土師質土器、瀬戸産水注や常滑焼片、備前焼片などの国産陶器も多く出土している。

③唐人町跡

唐人町は、大友館北東隅より北側に比定される第 2 南北街路沿いの町である。天正 14 年（1586）の島津侵攻までは、第 2 南北街路西側のみの片側町であり、島津侵攻後の復興の段階で両側町になったことが判明している。なお、南北街路東側は、称名寺推定地であるが、永禄年間には沖ノ浜に移転したとされており、府内古図の A 類には記入されていない。

【遺構】

南北街路西側の調査区では、16 世紀前半に遡る土坑等があるものの、主体は 16 世紀後半以降であり、町の形成時期は 16 世紀後半代と推定される。調査地点が町屋の裏に相当する部分が主体であったため、井戸や廃棄土坑が多数検出された。明確な形の建物跡は未検出であるが、遺構分布状況等から、建物 1 棟の存在が推定された。

唐人町付近の第 2 南北街路は 16 世紀後半に版築状の工法により築造され、約 6 mの幅を有する。唐人町南端と南隣の大友館・桜町との境界では名ヶ小路と第 2 南北街路とが交差する「辻」となるが、第 2 南北街路は直進せず、西側にクランクして交差していることが確認された。交差点北側の第 2 南北街路上では唐人町の木戸礎石が検出され、島津侵攻時の焼土で覆われていた。侵攻後に街路は復旧されている。

唐人町の東、称名寺推定地は 14 世紀頃から遺構がみられ、15 世紀には瓦が出土する遺構等があることから、称名寺が存在したと推定されている。16 世紀後半～島津侵攻の間は、大規模な堀を巡らせ、低い土塁または築地とみられる遺構等が確認されている。島津侵攻後には、堀は埋め戻されて、建物や井戸がつくられており、この段階で唐人町が両側町になったと推定される。

【出土遺物】

唐人町跡からの出土遺物は、華南三彩陶器をはじめ、中国産を主体する貿易陶磁器が比較的多くを占めることが注目されており、繭型分銅や骨牌も出土している。なお、肥前陶器や鉄線引きの瓦が出土しており、島津侵攻後、府内城下町への移転までに復興されていることが出土遺物からも傍証される。

推定称名寺の堀からは、唐枕や真鍮製チェーン、真鍮製灰匙、ヨーロッパ産ガラス杯などの稀少品のほか、食生活を示す動物骨や有機物残滓も多く出土している。

④推定御蔵場跡

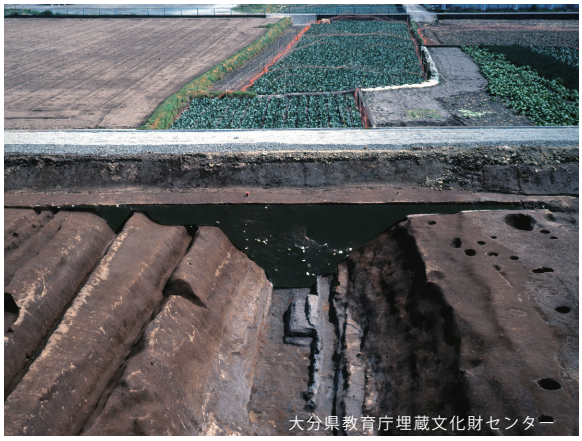
推定御蔵場跡は、「府内古図」によると大友館の南側に記載されており、その存在が推定されている。推定御蔵場跡では、3 回の確認調査が行われており、遺構が最初に確認できる時期は、14 世紀後半からである。

【遺構】

14 世紀後半から 16 世紀前半までは、推定御蔵場跡の周辺部の北側から西側にかけて、溝が確認できる。しかし溝の性格は明確でなく、道路側溝あるいは区画溝と推定される。また内部では、規模の大きな区画溝が検出されており、武家地などの可能性が想定され、一般的な町屋とは異なる様相を呈している。

16 世紀後半は、北側周辺部に、2 条の溝とその溝に挟まれた状況で、築地 (土塁) 状、もしくは道路状とされる遺構が確認でき、南側 (推定御蔵場跡) と北側 (林小路町) の境の状況を示している。また西側と東側にも南北の溝が確認でき、推定御蔵場跡の境界と思われる。内部からは礎石建物跡や掘立柱建物跡、土坑などが検出

旧万寿寺地区全景（南から:2010 年撮影）



旧万寿寺堀跡（西から）

旧万寿寺堀跡から出土した金襴手碗・皿

唐人町跡調査地点と出土した骨牌

第 2 南北街路と称名寺堀（北から）

大分県教育庁埋蔵文化財センター

称名寺堀から出土した真鍮製灰匙、ガラス坏

第 2 南北街路上に残された唐人町の木戸跡（礎石）

推定御蔵場跡空中写真（南東から：2010 年撮影）

される。16 世紀後半の推定御蔵場跡の区画溝で囲まれた範囲は、発掘調査の成果によると東西約 200 m、南北約 90 m、面積約 18,000㎡である。16 世紀後半段階に公的な機能を持ち、その中で御蔵場としての利用もあった可能性が指摘されている。

【出土遺物】

推定御蔵場跡からの出土遺物は、土師質土器、備前焼などの国内陶器、中国産貿易陶磁器をはじめ、分銅や鉄器などが出土しており、瓦などはほとんどみられない。

⑤上原館跡

上原館跡の発掘調査はこれまで６回行われており、特に土塁の調査では、２時期に渡って構築していることが判明している。

【遺構】

上原館跡は現地表面観察を行うと、館外郭周辺には土塁・堀跡・切岸等が残存し

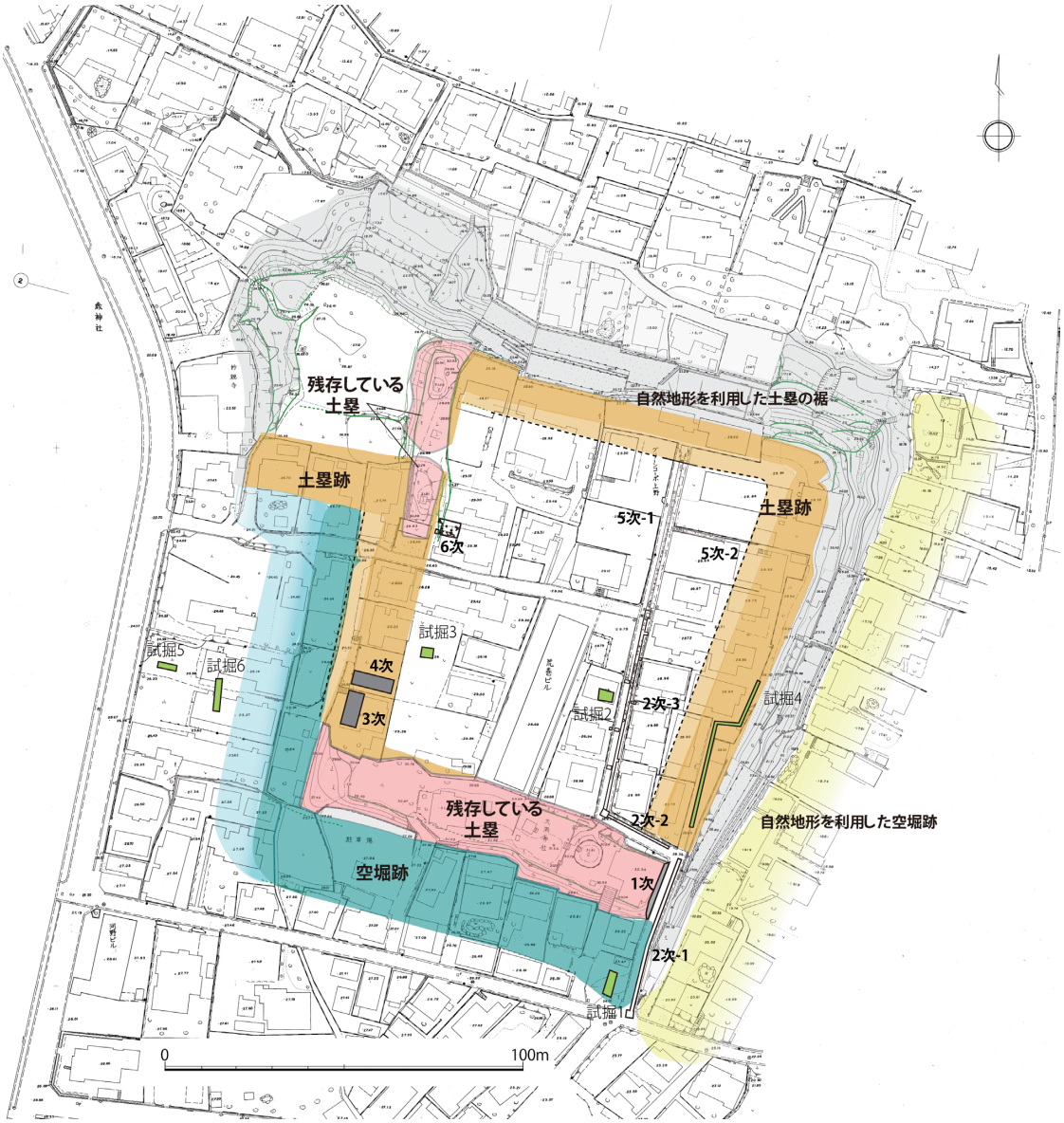


図 1-8 上原館跡全体図（試掘調査の位置）

ており、北西側には、曲輪状の平場が認められる。発掘調査では、館の南にある東西土塁のトレンチ調査から、最低２時期の構築が考えられる。１期目の土塁は 15 世紀後半～ 16 世紀前半で、積土は水平の版築状である。２期目の土塁は 16 世紀後半で、積土は斜堆積で、１期土塁を覆う状況で確認されている。特に２期目の土塁は、天正 14 年（1586）の島津氏の豊後侵攻との関連が考えられる。その他の遺構については、館内部で 16 世紀段階の柱穴群や整地層が検出されており、建物跡が展開していた可能性が高い。

【出土遺物】

これまでの調査で出土した遺物は少ないが、１期土塁中からは青磁碗が出土しており、また、館内部にあたる地点では京都系土師器皿が出土している。

第１次調査　土塁

第４次調査　土塁土層断面

第２次調査区北端部　土塁跡

４．関連遺跡の調査概要

中世大友府内町跡では、平成 25 年 12 月末までに 104 箇所の地点において調査が行われている。主に大分駅高架化事業や国道 10 号線拡幅事業、都市計画道路の新設・拡幅事業、民間開発などによって調査が実施され、多くは現在の錦町、元町（大字大分）、顕徳町に当たる。

中世大友府内町は、南北４本、東西５本の街路により区画されている。南北４本の街路は、町割りの基盤となる街路であり、便宜上、東側（大分川側）から第１～第４南北街路と呼称している。遺構は 14 世紀から認められており、これは徳治元年 (1306) の万寿寺建立が、その契機になっていると考えられる。これ以降、主に桜町、横小路町、御所小路町、上町・中町・下町、ノコギリ町の調査において区画に関する溝や、道路などの遺構が確認されており、15 世紀～ 16 世紀後半にかけて、最も東側の第１南北街路と第２～４南北街路に示される２つの軸を基本として町割りがなされていたことがわかっている。

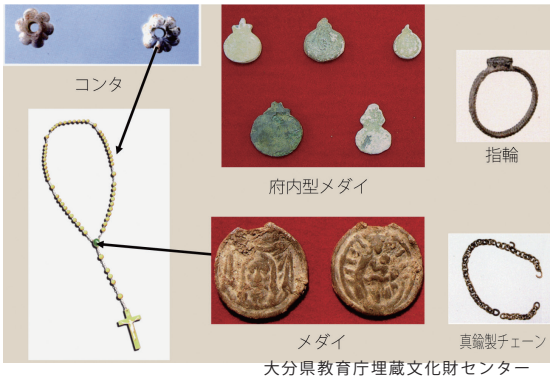
町は街路に沿った両側町や片側町として形成されている。桜町や上市町、寺小路町の調査では、街路に沿って建物が建ち並び、その裏手には廃棄土坑や、共同で使

横小路町跡で検出された甕蔵跡

万寿寺南側の第 1 南北街路と両側町（寺小路町跡）

中世大友府内町跡出土　貿易陶磁器類

中世大友府内町跡10次で検出された推定キリシタン墓



中世大友府内町跡出土西洋文化関連遺物

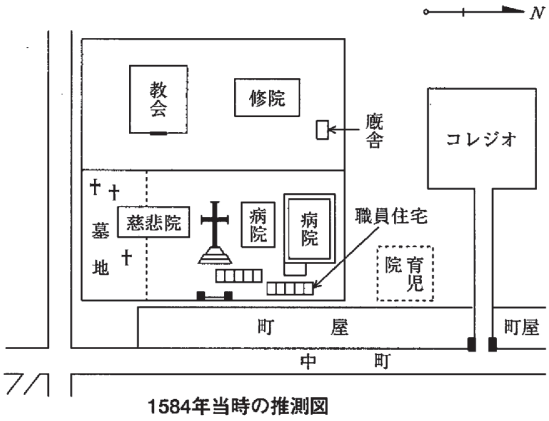


図 1-9 キリスト教関連施設配置推測図

五野井隆史 2004「豊後府内の教会領域について」より

用されたと考えられる井戸が並んでいる様子が確認されている。これらの調査では、街路端から井戸などが造られる場所までの奥行きは 30 mほどであり、これより裏手は畠地などの使用が考えられる。さらに上市町の調査では、「府内古図」に示されない第 1 南北街路の間を抜け、裏手に進入するための通路も確認されている。

16 世紀後半には、府内のまちの各所で、遺物量が増加し、特に輸入陶磁器が盛んに持ち込まれている状況が見られる。なかでも、横小路町の調査では、青花などの中国産磁器のほか、いわゆるトラディスカント壺と呼ばれる貼花唐草文五耳壺や鶴形水注を含む華南三彩、朝鮮王朝産陶器、タイ、ミャンマーなどの東南アジア産の陶器壺などの多種多様な輸入陶磁器が数多く出土しており、対外的な交易の盛ん

な様子が看て取れる。

そのほか、府内のまちを特徴づけるものとして、キリシタン・西洋文化関連の遺構・遺物があげられる。府内教会（ダイウス堂）推定地に近い林小路町西側の発掘調査では、キリシタン墓と推定される遺構が確認されている。また、メダイ、コンタツ、指輪などのキリスト教関連遺物は第２南北街路周辺の調査などで出土している。特にメダイの一部は「府内型メダイ」と称され、府内のまちで作られたと考えられており、西洋文化の広がりを示している。

府内のまちはその後、天正 14 年 (1586) の島津侵攻によって焼亡したと考えられているが、第２南北街路周辺の発掘調査では、島津侵攻時の焼土層とともに天正 14 年 (1586) 以降と推定される建物跡などが確認されており、その後の復興の状況が具体的に明らかになってきている。

５．大友氏遺跡の調査成果概要

（１）中世大友府内町跡の変遷

■　14 世紀

大分川河口左岸の沖積地（後に府内古図に描かれるエリア）においては 14 世紀初頭から遺構が出現する。旧万寿寺（徳治元年：1306　建立）創建時と推定される区画溝が確認されるほか、後に大友館外郭線となる場所に区画溝が認められるなど、本格的な都市建設が開始されたと考えられる。

■　14 世紀末～ 15 世紀前半

広い範囲で区画性の強い溝がつくられ、府内のまちの基本線がつくられる。大友館の範囲では礎盤石を有する規格性の高い建物がつくられる。旧万寿寺の寺域においても、同様な技法の建物がみられ、境内を区画する溝がつくられて整備が進められている。

■　15 世紀後半～ 16 世紀初頭

第１南北街路が整備され、第４南北街路も整備が開始される。推定御蔵場北側では、幅 2m で両側に溝を伴う土手状の積土遺構が 110 mにわたり検出されている。このころ上原館を築造したとみられる。

■　16 世紀前・中葉

京都系土師器の出現する時期である。林小路町では道路と直交する溝で区画された地点があり、武家地と推定される。御内町では溝で囲まれた方形館が検出される。

■　16 世紀後葉

府内のまち各所において、短期間に土木事業が行われ、景観が著しく変化する大規模な都市建設が行われたとみられる。

旧万寿寺西側では、16 世紀後半に堀が拡張され、その後 16 世紀末に堀が埋め

立てられ、その上に礎石建物が建てられる。あわせて道路（第２南北街路）が改めて整備され、町屋の形成がみられる。

大友館東側の桜町では、土取事業が行われた後にこれが埋め戻され、町屋と街路が整備される。桜町では間口の狭い地割が連続して作られているが、名ヶ小路との交差点の角地では広い土地の占有がみられ、５間×２間の礎石建物がＬ字に組み合わさる建物跡が検出されている。桜町は当該期に行われる大友館の再整備の後に、新たに建設された町と推定される。

■　16 世紀末以降

天正 14 年（1586）12 月、島津氏による侵攻により府内のまちは焼亡したが、天正 17 年（1589）には一定程度、復興していたことが伊勢参宮帳より推測され、第２南北街路沿いの遺構の状況においても確認される。慶長７年（1602）の近世府内城下町へ町屋の移転が行われて以降、遺構はみられなくなる。

（２）大友氏館跡の変遷

■　Ⅰ期（14 世紀後半～ 15 世紀前半）

館南東部では、面的な整地が行われて、規格性の高い掘立柱建物跡群が配置され、また、門の可能性がある遺構も形成される。

■　Ⅱ期（15 世紀後半）

館中央部～東側で広範な盛土整地が行われ、礎盤石を伴う建物跡やかわらけだまりなどがその上面に形成される。以後この整地範囲で繰り返し整地が行われていくことになり、中心建物域と考えられる。その西側には南北方向の大規模な溝がみられ、この段階では東西１町の規模であった可能性がある。

■　Ⅲ -1 期（15 世紀末～ 16 世紀第１四半期）

Ⅱ期の盛土整地範囲内の一部で、掘り込み整地が行われ、整地周辺に土師器廃棄土坑が分布することから、この範囲に中心建物が展開していた可能性が高い。館の北西地区には溝で囲まれた方形区画が形成される。このころ庭園が築造されたと考えられる（Ⅰ期庭園）。

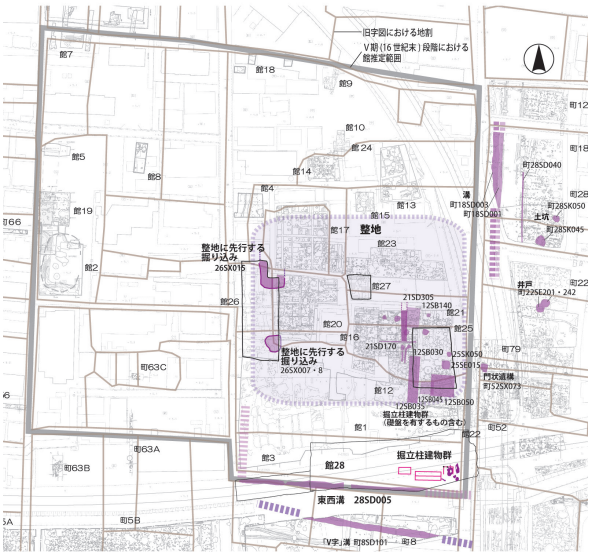
■　Ⅲ -2 期（16 世紀第２四半期）

館北西地区の方形区画が埋められる。館の中心部には浅い掘り込み整地が改めてなされ、中心建物として礎石建物が建てられていた可能性がある。北側には京都系土師器からなるかわらけ廃棄土坑が複数形成される。中心建物の周辺にはこれを囲む形で溝が掘られる。この時期までⅠ期庭園が継続した可能性がある。

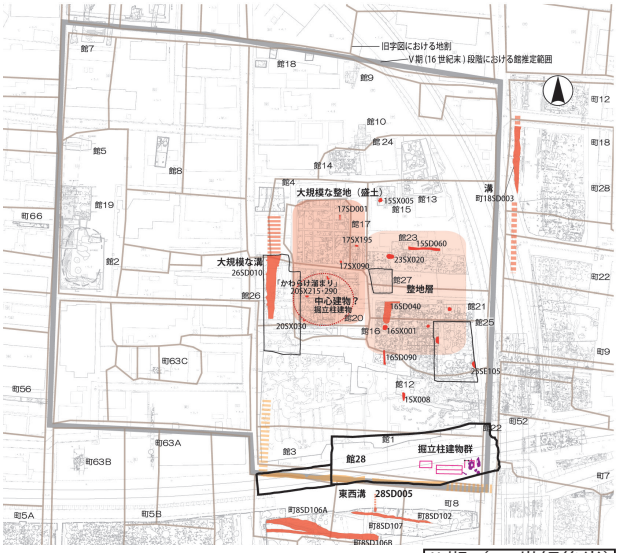
■　Ⅳ期（16 世紀第３四半期）

中心部で改めて掘り込み整地が行われ、大型の礎石建物が建てられる。中心建物は依然溝により区画される。館北辺には２条の溝に挟まれた積土遺構が形成され、特徴的な外郭施設が出現する。Ⅱ期庭園が造られる。

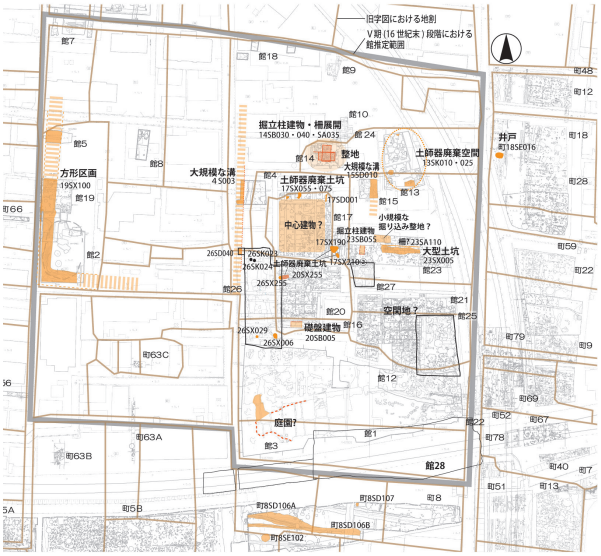
■　Ⅴ期（16 世紀第３四半期～ 1586）



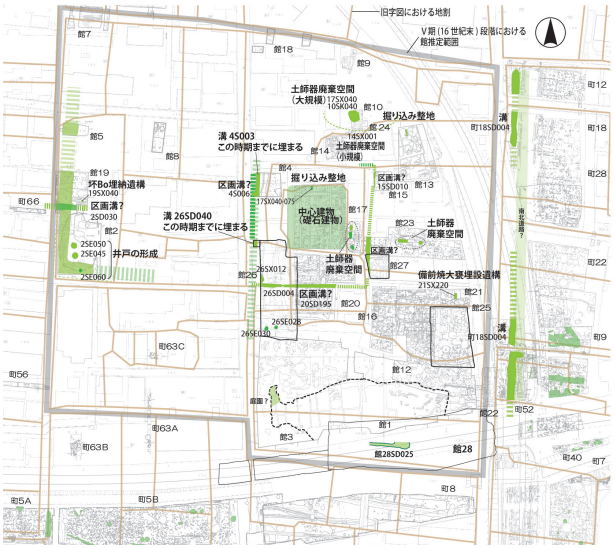
Ⅰ期（14 世紀後半～ 15 世紀前半）



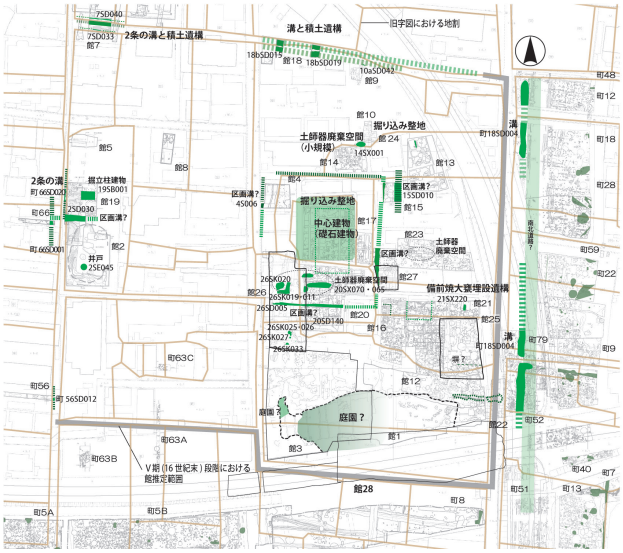
Ⅱ期（15 世紀後半）



Ⅲ -1 期（15 世紀末～ 16 世紀 1/4）

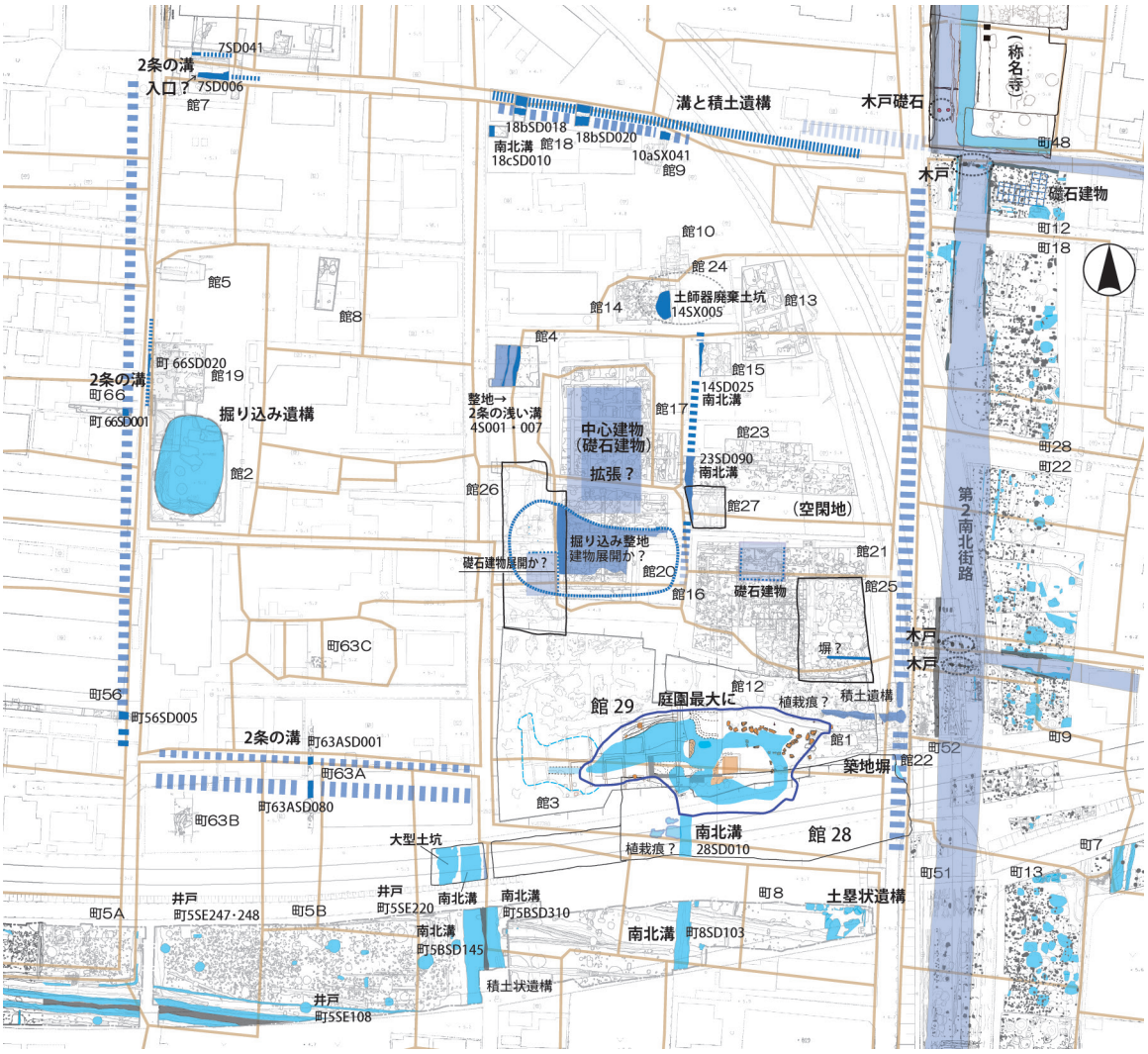


Ⅲ -2 期（16 世紀 2/4）



Ⅳ期（16 世紀 2/4 ～ 3/4）

図 1-10 大友氏館跡遺構変遷図①（1/3500）



V期（16 世紀 3/4 ～ 1586）

VI期（16 世紀 1587 ～ 1602）

図 1-11 大友氏館跡遺構変遷図②（1/2000、1/3500）

館が方２町（約 200 m四方）に拡張されると考えられる。中心建物は拡張され、根固石を伴う大型礎石を使用した礎石建物となり、南北 29 m、東西約 15 mの規模となる。北・西・南辺で２条の溝に挟まれた積土遺構からなる外郭施設、東辺では築地塀と見られる積土遺構が造られる。巨石による景石と池・中島を伴う非常に大規模な庭園（Ⅲ期庭園）が造られる。

■　Ⅵ期（1586 ～ 1602）

島津侵攻後に館は復興されず、第２南北街路沿いに面する館の敷地の一部は町屋となる。

大友氏館跡の中心建物

16 世紀後半～末（Ⅳ～Ⅴ期）における大友氏館跡の中心建物は大型の礎石建物と考えられるが、朝倉氏館跡にみられるような「主殿」形式の建物に比して著しく大型の礎石が使用されたと想定される。発掘調査事例では、仙台城大広間等の根固石を有する遺構が大友氏館跡の事例に近いことが考えられており、近世的な大広間や御殿建築に近い要素を有する可能性が指摘される。「當家年中作法日記」には「大おもて」と称された施設が大友館内にあったことが記されているが、家臣など 200 人程が一堂に会して儀式や宴会を執り行うことが可能な広さであったと推定されている。

中心建物跡（北西から：2007 年撮影）

６．大友氏遺跡の評価

大友氏遺跡をその中に含む豊後府内に関しては、近年の発掘調査や関連文献史料など、学際的研究の進展がめざましく、様々な分野から大きな注目を集めている。

日本の中世遺跡を扱った展覧会などでは、豊後府内を構成する中世大友府内町跡に関する資料の出陳の依頼が多数あり、現在、数十万点に及ぶといわれる出土遺物や関連資料の中から、それぞれのジャンルに沿った遺物の展示・公開が行われている。近年の主な事例には、2005 年 3 月から同年 11 月まで開催された「東アジア中世海道」展や 2013 年の「時代を作った技 － 中世の生産革命 － 」展などがある。前者は千葉会場、大阪会場、山口会場と全国三か所で開催され、12 世紀から 16 世紀の東アジアの海を舞台にした交流の歴史と文化の煌きを、考古、文献、美術、民俗資料などの多様な展示品を通して描いたものであり、後者は最新の成果を盛り込みながら、文献史学・考古学・民俗学・美術史学・分析科学などの多視点から、新しい中世の技術史像を明らかにしたものである。

また一方で、近年の学会等では、その多岐にわたる研究において、豊後府内が注目される事例が多くなってきている。2011 年には、国内及び東アジア地域を中心にした貿易陶磁器類等をテーマとする日本貿易陶磁器研究会が、「南蛮貿易と陶磁器」と題して大分市で行われた。多種多様な貿易陶磁器が豊富に出土する豊後府内に大きな関心が示された形での地元開催であり、国内は勿論のこと、グローバルな視点での高い評価がなされている。また､都市の歴史そのものを扱ったものとして、全国の中世都市の実態を様々な角度から検討を行っている中世都市研究会、さらに西日本の中世都市を代表する博多・山口・大分を中心に、全国的かつアジア的な視野で、それぞれの都市の再評価を行っている三都市研究会等があり、このような学会の中で、豊後府内は、日本の中世都市史を考えるうえで必要不可欠な遺跡として位置づけられている。

このように最近では、数多くの展覧会や学会等で取り上げられており、南蛮貿易により栄えた都市である豊後府内が、国内やアジアの中において非常に重要な位置を占めていたとする認識が広まりつつある。

【参考文献】

週刊朝日百科 27『週刊　新発見！日本の歴史　戦国大名たちの素顔』2013　朝日新聞出版
図録『東アジア中世海道 - 海商・港・沈没船 -』2005　国立歴史民俗博物館
図録『時代を作った技 － 中世の生産革命 － 』2013　国立歴史民俗博物館
図録『染付　戦国大名が愛した魅惑のうつわ』2013　福井県立博物館
『東アジア海域に漕ぎだす 1　海からみた歴史』2013　東京大学出版会
『三都市遺跡における土師器研究の現状』2012　博多・山口・大分三都市研究会
中世都市研究会編『中世都市研究 18　中世都市から城下町へ』2013　山川出版社
ほか多数

７．大友氏遺跡の価値

大友氏遺跡は、14 世紀から 16 世紀末にかけて大分川の河口に近い左岸に形成された自然堤防上に立地した都市「豊後府内」の一部を構成する中世大友府内町跡の中核を成すものである。

豊後府内の中枢部は、16 世紀後半には南北 4 本、東西 5 本の街路が整備され、江戸時代初期に描かれた「府内古図」に示された姿に整備される。また、近世江戸時代の府内の城下町は、中世の豊後府内のまちとは重複せずに北側に平面移動して築かれている。そのため、中世大友府内町跡の地下遺構の遺存状況は良好であり、当時の地割の痕跡も比較的良く残されている。

平成 8 年から本格化した発掘調査の成果によると、「府内古図」の姿に整備される 16 世紀後半に遺構・遺物が質・量ともに最大化し、史実に示される南蛮貿易の推進により繁栄した府内の姿を示している。この時期は、数百年続いた府内のまちを最も象徴的に特徴づけるものであり、他の戦国都市にはみられない中国・朝鮮半島・東南アジア地域との貿易により繁栄した「国際貿易都市」に、「戦国大名の館を中心に発展したまち」という二つの性格を併せ持つという特性を有している。

また、豊後府内に関しては、キリスト教宣教師の報告をはじめとする海外の文献資料が多く残る点も大きな特徴であり、全国に先駆けて東洋文化と西洋文化の出会いの場となり、独特の南蛮文化を育んだ地であることを詳細に窺い知ることができる。このように大友氏遺跡は世界的な広がりをもつ遺跡であるとともに、今後、実施される調査によっても日本中世史研究に新たな知見を提示できる大きな可能性をもつ遺跡であると言える。

大友氏遺跡は、「大友氏館跡」・「旧万寿寺地区（旧万寿寺跡、武家地、商業店舗地、手工業者地）」・「唐人町跡」・「推定御蔵場跡」・「上原館跡」の各遺跡から構成される。

以上の状況から、大友氏遺跡の価値を次の 6 項目に集約することができる。

①「大友氏 400 年の拠点」

大友氏は、関東御家人出身であり、鎌倉時代以来一貫して豊後守護をつとめた。豊後国への下向は鎌倉時代中頃の第 3 代頼泰からとされ、以後、文禄 2 年（1593）に第 22 代義統（吉統）が除国されるまで府内を拠点として繁栄した。また、南北朝時代以降の歴代当主は、中国、朝鮮との海外貿易を積極的に進め、なかでも第 21 代義鎮（宗麟）の頃には、キリスト教の布教許可を背景に南蛮貿易を推進し、莫大な経済力を獲得、北部九州 6 カ国を支配する大名となった。

府内のまちは、これまでの発掘調査成果によると、14 世紀代から遺構の展開が確認されている。その後、段階的に街路が整備されており、最盛期である 16 世紀後半から末に至るまで、連続的に都市発展の経過を知ることのできる全国でも珍しい都市遺跡である。

②「中世を代表する守護館の典型」

大友氏遺跡の中核をなす大友氏館跡は、大友氏の領国支配の中心として 14 世紀後半～末（第 10 代親世の頃）以降整備され、16 世紀末の島津軍の府内侵攻による廃絶まで継続的に営まれたと推定される。15 世紀代には、中心施設付近に広い範囲で大規模な整地が行われ、16 世紀になると館南東部分に庭園が造営される。庭園には複数回の造り替えが認められるが、16 世紀末の最終段階には東西 66m、南北 28m の巨大な池をもつ庭園が整備されている。また、この時の中心建物は大型の礎石建物となっており、東西 15m、南北 29m の規模を有していたと推定される。館範囲については最盛期に方二町（約 200m 四方）に拡張整備されたとみられ、四周は塀により囲まれていた。出土遺物についても、ステータスシンボルとしての中国陶磁器の出土が顕著であり、室町将軍同様に唐物を珍重し、座敷を飾っていたものとみられる。こうした大友氏館跡の状況は、室町幕府の規範を遵守する守護館の典型を示すものとされる。

③「地方最大級の禅宗寺院跡」

旧万寿寺跡は、鎌倉時代末期の徳治元年（1306）に府内のまちで最も早く建設された主要施設であった。寺域は南北約 360m、東西 250m 以上と巨大であり、京都の著名な禅宗寺院に匹敵する規模をもつ地方最大級の寺院であった。また、室町時代初期には十刹に列せられた高位の寺院でもあり、16 世紀中頃～後半の時期には巨大な堀で寺域を囲んでいた。

④「南蛮文化発祥の地」

義鎮（宗麟）とフランシスコ・ザビエルの会見により、府内でのキリスト教布教が許可される。これ以降ポルトガル船の来航がたびたびあり、府内の地で西洋文化と東洋文化、さらに日本古来からの伝統文化が融合し独創的な南蛮文化が全国に先駆けて誕生した。

キリスト教の伝来とともにもたらされた学問、技術、美術、風俗などは、早くからキリスト教布教の中心となった府内のまちで義鎮（宗麟）の庇護のもと、1550 年代から 80 年代にかけて次々に建設された教会、病院、教育施設を中心に広まった。

西洋文化受け入れの窓口となったキリスト教を象徴する出土遺物に「メダイ」があるが、調査成果によると、メダイはキリスト教信者の急増に対応すべく、府内で製作されていたとみられている。これは我が国初の国産キリスト教遺物と評価される。

⑤「国際貿易都市遺跡」

記録の上では、ザビエルの来府の数年前から既にポルトガル商人が中国商人とともに府内のまちを訪れ、滞在しているが、この頃から沖ノ浜を外港とした貿易が行われたと考えられる。本格的な南蛮貿易は、1551 年のポルトガル船の来航から開

始され、この頃以降16世紀末にかけて、府内のまちは国際貿易都市として発展した。大友館の北東側隣接地には、中国系商人の居住を推定させる唐人町が形成された。

発掘調査では、中国をはじめ、朝鮮、ベトナム、タイ、ミャンマーなど、東アジアや東南アジア産の陶磁器が豊富に出土し、当時の南蛮貿易の様子を具体的に示している。また、陶磁器には大型の壺が多くみられ、これは貿易品を船に搭載するための容器と推定される。さらに、中国産陶器の擂鉢や骨牌などの出土は、中国人の居住や中国人の生活文化が直接的に府内にもたらされたことを示す出土遺物といえる。

近年の理科学分析の結果からは、火縄銃の玉やメダイの製作に使用される鉛が、東南アジア（タイ）産鉛であることが判明しており、当時、府内に様々な文物が貿易品として持ち込まれたことが明らかとなっている。

⑥「機能分化した城館」

大友氏遺跡には、大友氏館跡を中心とした中世大友府内町跡エリアにある経済的側面を示す遺跡と、巨大な堀と土塁を持つ軍事的性格を強く示す遺跡である「上原館跡」がある。「上原館跡」は、中世大友府内町跡エリアの背後の上野台地に立地し、大規模な土塁と空堀を有する防御に特段の配慮がなされた城館である。15世紀後半以降に整備された後、16世紀後半～末に再整備されたと見られるが、16世紀代には、大友館と併存しており、高崎山山頂にある「高崎城」とともに、大友氏の軍事的役割を担う施設として機能していた。

上原館跡と大友館を中心とする府内のまちとの間には、それらが担う機能と性格のうえで、強いコントラストの存在を窺うことができる。